

山口県白鳥古墳と阿多田古墳の副葬品

岩本 崇・上野 祥史・谷澤 亜里

はじめに

山口県南東部に位置する熊毛地域では、古墳時代前・中期の前方後円墳が集中して築造され、この時期に熊毛半島を拠点とした有力集団の存在を想定することが可能である。しかし、これら諸古墳から出土した遺物については、既往の報告等において十分な資料提示がなされてこなかった感がある〔弘津 1921・1927、山口県教育委員会文化課 1980〕。そのため、当該地域の各古墳が具体的にどのような時間的前後関係にあるのかはいまひとつはっきりしない。これまでに示された定点となる理解は、白鳥古墳→阿多田古墳の築造順序とこれらの古墳が古墳時代中期に比定されるとの認識であった〔潮見・本村 1978〕。いっぽうで、ごく最近にこの築造順序が逆転するとの見方も示されたが〔岡田 2022〕、やはりその根拠となる資料の提示が十分になされておらず、上記した課題は残されたままとなっている。

以上の研究現状にかんがみ、本稿では白鳥古墳と阿多田古墳を対象として、2基の古墳から出土した副葬品の資料報告とそれをふまえた若干の検討をおこない、古墳の築造時期にかかわる既往の評価を検証することとする。

(岩本)

1. 白鳥古墳の副葬品 (図1～8、表1・2、図版9～13)

白鳥古墳は周防灘に突出する熊毛半島の西岸のほぼ中央に位置し、古墳の西側に海を望む立地をとる。墳丘長120mの前方後円墳であり、後円部を3段築成とする。墳丘斜面に葺石、墳頂のほか各段の平坦面に円筒埴輪をめぐらし、平坦面には円礫を敷く。墳頂部からは家形埴輪など形象埴輪が配置されていたとみられる。

1749(寛永2)年の白鳥神社の社殿再建工事に際して、後円部が大きく削平され、埋葬施設から鏡2面、管玉11点、巴形銅器5点、鉄斧5点、鉄刀2振以上などが出土した。埋葬施設に使用されたとみられる赤色顔料を塗布した板石2枚が確認されており、組合式の箱式石棺の可能性が指摘されている〔潮見・本村 1978、弘津 1921・1927、山口県教育委員会文化課 1980〕。

(岩本)

(1) 銅 鏡

銅鏡は2面ある。いずれも古墳時代に日本列島で製作された倭鏡であり、前期倭鏡に比定されるものである〔岩本 2017b〕。モデルとなった漢鏡のデザインとの対応から、



図1 白鳥古墳の墳丘

それぞれを斜縁神獣鏡系、環状乳神獣鏡系と呼ぶこととしたい。

① 斜縁神獣鏡系〔鏡1〕(図2、図版9)

後漢末期あるいは三国初期に製作されたとみられる斜縁神獣鏡をモデルとした倭鏡である(図1、図版9)。神像2体と獣像2体によって構成される斜縁二神二獣鏡である。

遺存状態 内区外周部から縁部にかけての一部を破損・欠損する。各所に錆に覆われた部分が目立ち、錆ぶくれも少なくないが、本来の表面状態を比較的良好にとどめた部分も多い。鏡背面の凹部には赤色顔料がみとめられる。また、鏡背面の外区付近ならびに鏡面に鉄錆が付着した範囲がある。鏡背面ならびに縁端面については、多方向に粗い研磨条痕が観察され、二次的に研磨がほどこされた可能性が高い。



図2 白鳥古墳出土 斜縁神獣鏡系(鏡1)

法量 直径 17.6cm、厚さは内区で 1.2～2.0mm 程度、外区で 2.5mm 程度である。鏡面の反りは 6.5mm 程度と強い。重量は 441g である。

文様・形態 中心にある鈕は直径約 3.3cm、高さ約 1.0cm と高さのわりに大きく、頂部がやや扁平な形態をもつ。鈕孔は円形を呈する（図版 11-1・2）。鈕孔下辺の高さは鈕座面と等しい。鈕座は円座と有節重弧文座の 2 帯からなる。

内区主文部は 4 つの乳によって区画し、4 区画のそれぞれに 1 体ずつ神像と獣像を交互に配列する。やや大きめの円座にのる乳は半球状を呈する。神像には脇侍が 1 体付属し、一方が坐像、もう一方が立像である。獣像は顔面を正面観で表現したものと側面観で表現したものがあり、それぞれに脇侍が 1 体ずつともなう。乳の周囲には、小さな表現ではあるが、鳥頭をもつ獣像が合計 3 体配される。

内区主文部と圏線を隔てた内区外周部は、擬銘帯と櫛歯文帯からなる。擬銘帯は S 字文や弧文、円文、鉤形文、複線波文などを組み合わせたものである。

外区は斜面を介して内区より一段高くなり、内側から外向する鋸歯文帯、複線波文帯、外向する鋸歯文帯からなる。各文様帯は圏線によって画され、外側の鋸歯文のさらに外側に外周突線をめぐらす。さらに仔細に観察すると、外区の内側の鋸歯文帯と複線波文帯は外側の鋸歯文帯より施文基盤面がわずかに低くなっている状況を確認できる。文様帯の外側の縁部は反りが強い斜縁をなす。

製造・研磨 文様表出の不鮮明な部分があるが、文様の上面に限られていることから、鑄造後の研磨もしくは摩滅によるものとみられる（図版 11-5）。内区主文様の高い部分を除けば、細部に至るまで細かな表現が鑄出されているため、本来は鑄上がりのよい製品であったと考える。写真で 7 時方向の神像区の脇侍の外側の外区文様（内側の鋸歯文と複線波文）に表面の荒れと不鮮明を確認できるため、鈕孔とこの部分を結んだ延長線上の縁部に湯口がとりつけられていた可能性が高いと考える。外区上面や鈕上面はきわめて平滑に仕上げられており、丁寧な仕上げの研磨がほどこされたと判断される。

② 環状乳神獣鏡系〔鏡 2〕（図 2、図版 10）

後漢後期に製作された環状乳神獣鏡をモデルとした倭鏡である（図 2、図版 10）。神像 4 体と獣像 4 体によって構成される四神四獣鏡形式である。

遺存状態 縁部をわずかに破損するが、完形鏡である。鈕と鏡面以外は薄い錆に覆われる。また、鏡背面に部分的に赤色顔料がみとめられる。

法量 直径 13.2cm、厚さは内区で 1.8～2.2mm 程度、外区で 2.4～3.0mm 程度である。鏡面の反りは 5mm 程度とやや強い。重量は 299g である。

文様・形態 中心にある鈕は直径約 2.3cm、高さ約 9mm であり、わずかに低い半球形を呈する。鈕孔は側辺がやや直線的ながら上辺が弧をなす形態である（図版 11-3・4）。鈕孔下辺の高さは鈕座面と等しい。鈕孔の開口部付近は丸みを帯びており、鑄造不良か摩滅の影響が想定される。鈕座は断面蒲鉾形の圏帯であるが、本来は文様がほどこされていたものが不鮮明になったと考えられる。

内区主文部は 8 つの乳によって区画し、8 区画のそれぞれに 1 体ずつ神像と獣像を交互に配列する。乳は先が丸みを帯びた円錐形に近く、モデルの環状乳を模したため斜面に突線を放射状に配する。神像はいずれも表現が共通する坐像である。獣像は維綱を銜えた頭部の表現にほぼ限られ、胴部以下をあらわさない。内区乳の内側には神頭が配される。

内区主文部と 2 条の圏線によって隔てた内区外周部は、半円方形帯と櫛歯文帯からなる。半円には 2 渦文を突線で表現し、方格は突線で区画を入れる。半円と方格は交互に 1 つずつ、それぞれ 11 個

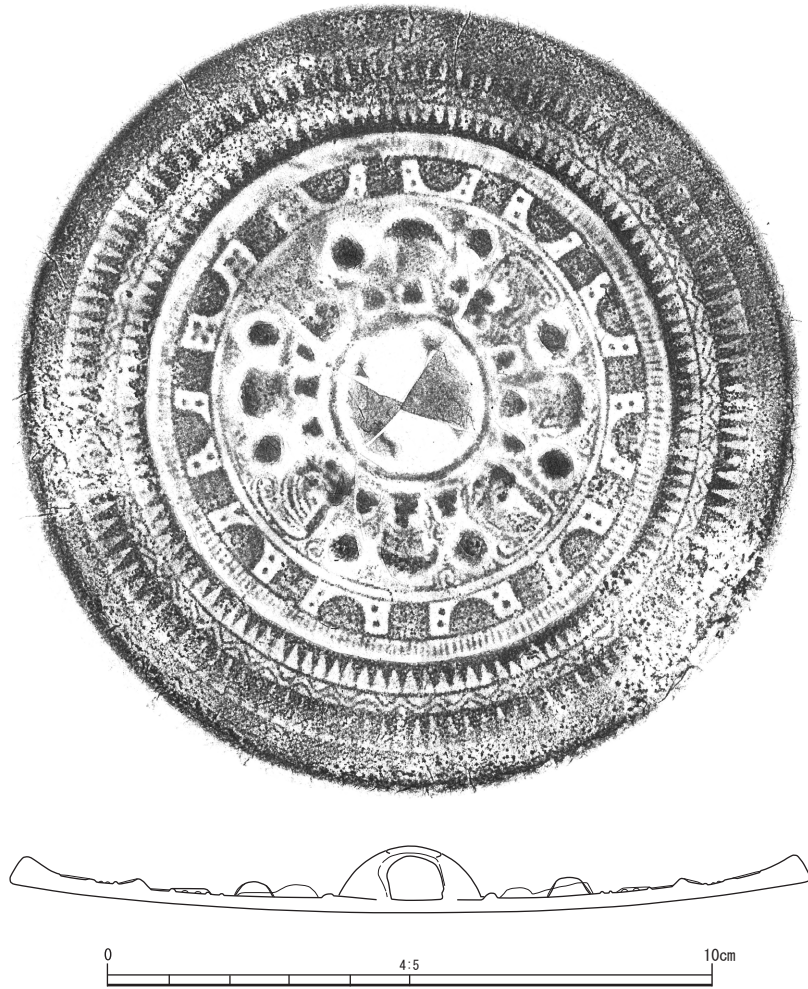


図3 白鳥古墳出土 環状乳神獣鏡系(鏡2)

を配する。半円と方格の間は珠文によって画する。

外区は斜面を介して内区より一段高くなり、内側から外向する鋸歯文帯、複線波文帯、外向する鋸歯文帯からなる。内側の鋸歯文帯をめぐらす部分を肥厚させ、内外区の境界を強調する点が特徴的である[岩本2010、加藤2021:84-85]。文様帯の外側の縁部はゆるやかな斜縁をなす。

鑄造・研磨 鏡背面は全体に文様の不鮮明な部分が多い(図版11-6)。なかでも写真で10時から12時方向の内区主文部の外側から内区外周部、外区にかけては不鮮明さがほかより際立っており、鈕孔の開口方向と一致する点からも、鑄引けによる影響とみられる。湯口位置を反映する鑄造欠陥と考える。これにたいしてほかの部分は、文様の上面は不鮮明ながらも文様の立ち上がりは比較的鮮鋭な状態を呈するといった違いがある。文様上部のみ不鮮明であるのは摩滅などによるものと推定される。縁頂部などが丸みを帯びた形状であることとも整合する。仕上げの研磨については、大部分が錆で覆われているため判然としないが、鈕についてきわめて平滑な表面状態であり、丁寧な研磨がほどこされたことがわかる。(岩本)

(2) 玉 類 (図4、表1、図版11-7)

管 玉 11点あり、いずれも直径7~11mm程度の太型品である。3種類に分類できる。最も多いのは淡色の緑色凝灰岩製で鉄錐穿孔されたものである(1~3・5~9・11)。大賀[2013]の分

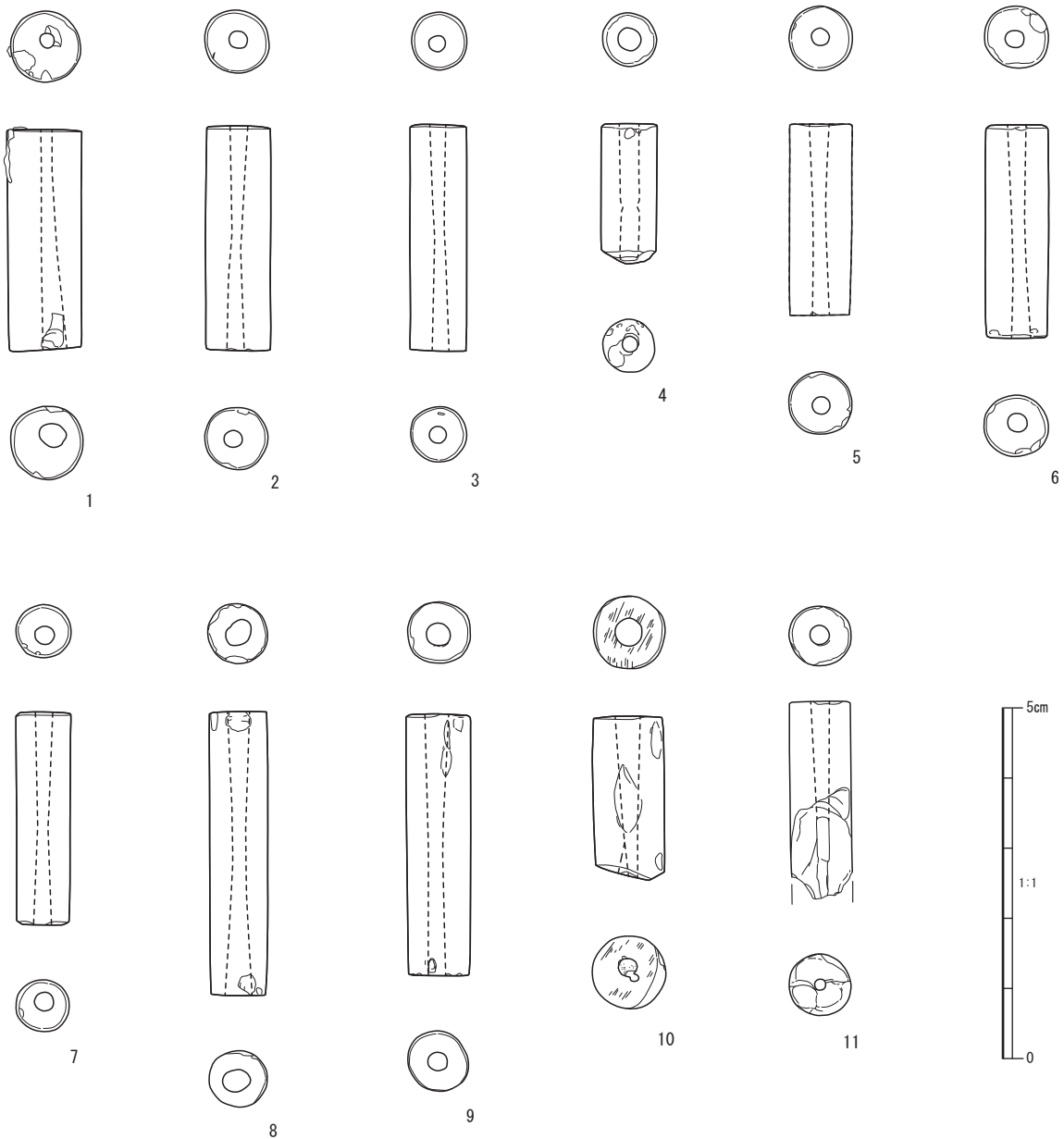


図4 白鳥古墳出土 管玉

表1 白鳥古墳出土 管玉

番号	材質	穿孔具	穿孔方向	最大径 (mm)	最大長 (mm)	備考
1	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	片面	10.30	32.30	錆付着
2	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	8.15	32.20	
3	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	9.05	32.20	
4	(未定 C 群)	鉄錐	両面	7.70	(20.00)	欠損後摩滅
5	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	8.90	27.40	
6	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	9.00	30.80	
7	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	7.40	30.15	
8	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	8.15	40.90	
9	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	9.00	37.50	
10	碧玉 (花仙山産)	鉄錐	(両面)	10.70	(22.70)	欠損後再研磨、孔内錆詰まる
11	硬質緑色凝灰岩	鉄錐	両面	8.50	(28.20)	欠損

類では北陸系（領域F）に該当する。4は淡緑色で光沢のある石材で、石針により両面穿孔される。一方の端面は欠損後に摩滅している。大賀〔2013〕の分類では半島系に該当する。10は濃緑色の花仙山産碧玉を素材とし、鉄錐穿孔である。一見すると片面穿孔のようだが、本来は両側からの穿孔があったことが一方の端面で観察できる。また、両面穿孔を確認できる側の端面は研磨されているが軸に大きく斜行し、欠損後に再加工されたものとみられる。（谷澤）

（3）巴形銅器（図5、図版12）

5点の巴形銅器が出土している。いずれも中心部に円座をともなう円錐体部があり、四脚がとりつく。円錐体部の裏面に棒状鈕が鋳出され、脚は左振りである。大きさからおおまかに2群をみとめることができ、円錐体部を含む座径が2.5cm程度のもの2点と3.0cm程度のもの3点がある。脚部の遺存状態が良好ではないため全容の判明する個体は限られるが、やや小さい一群は全径6cm程度、やや大きい一群は全径6.7cm程度である。法量的には大きな違いはなく、同一法量規格内でのわずかな違いとみられる。この違いは、脚どうしの間隔の広狭とも対応しており、生産単位の差などに起因するものと考えられる。仕上げについては、どの個体においても表面は研磨をほどこすが、裏面は鋳放しに近い状態である。

1は、四脚の先端と円錐体部の頂点付近を欠損するが、およその全形を把握できる個体である。重量は30g。全径が6cm程度、座径2.5cm程度、円錐体部径2.0cm程度、径復元高1.4cm程度である。脚の幅はやや狭く、やや広い間隔の脚間には鋳張りを残す部分がある。脚面には鋳造不良によるものとみられるやや目立つ窪みがある。裏面は円錐体部と円座に相当する範囲が浅く窪む。棒状鈕は太さ3mm程度で、両端がやや太くなる。鈕は裏面よりごくわずかに浮いた位置に設定され、円錐体部との境界にわずかな段差をもつ。表面には赤色顔料が付着する。

2は、脚部をほぼ欠損する。重量は17g。座径2.5cm程度、円錐体部径1.9cm程度、高さ1.5cm程度である。脚の幅は狭めで、脚どうしの間隔はやや広い。裏面は円錐体部と円座に相当する範囲が浅く窪む。棒状鈕は太さ3.0～3.5mm程度で、図で中央より右側の部分でわずかな段差があり、若干の傾きもみられる。鈕はきわめて低い位置に設定される。裏面に赤色顔料が付着する。

3は、脚部をほぼ欠損する。重量は24g。座径3.0cm程度、円錐体部径2.2cm程度、高さ1.7cm程度である。脚どうしの間隔は狭い。裏面は円錐体部と円座に相当する範囲が浅く窪む。棒状鈕は太さ2.0～3.0mm程度である。鈕は円錐体部のごくわずかに浮いた位置に設定される。なお、裏面には木質と布の付着がみとめられる。

4は、脚部の半分強ほどを欠損する。重量は30g。座径3.0cm程度、円錐体部径2.1cm程度、高さ1.7cm程度である。脚どうしの間隔は狭い。裏面は円錐体部と円座に相当する範囲が浅く窪む。棒状鈕は太さ2.0mm程度で、両端が太くなる。鈕は円錐体部のやや浮いた位置に設定される。なお、円錐体部の頂部近くに湯回り不良とみられる鋳造欠陥のためか孔がみられる。円錐体部の厚みをみると場所により差が著しく、中子の設置に際しての型ずれを想定できるかもしれない。

5は四脚を部分的に欠損するが、比較的良好に残る個体である。重量は44g。全径が6.7cm程度、座径3.0cm程度、円錐体部径2.3cm程度、径復元高1.5cm程度である。脚は付け根の幅がやや広く、脚どうしの間隔は狭い。脚の振りの内側に当たる部分の端面を研磨する箇所がみられる。裏面は円錐体部と円座に相当する範囲が浅く窪むとともに、全体にシワ状の凹凸が目立つ。棒状鈕は太さ2mm程度で、両端がわずかに太くなる。また、中ほどで上下方向に少しずれがみられる。鈕は円錐体部のやや浮いた位置に設定される。なお、場所によって円錐体部の厚みに差がある状況を確認できる。表

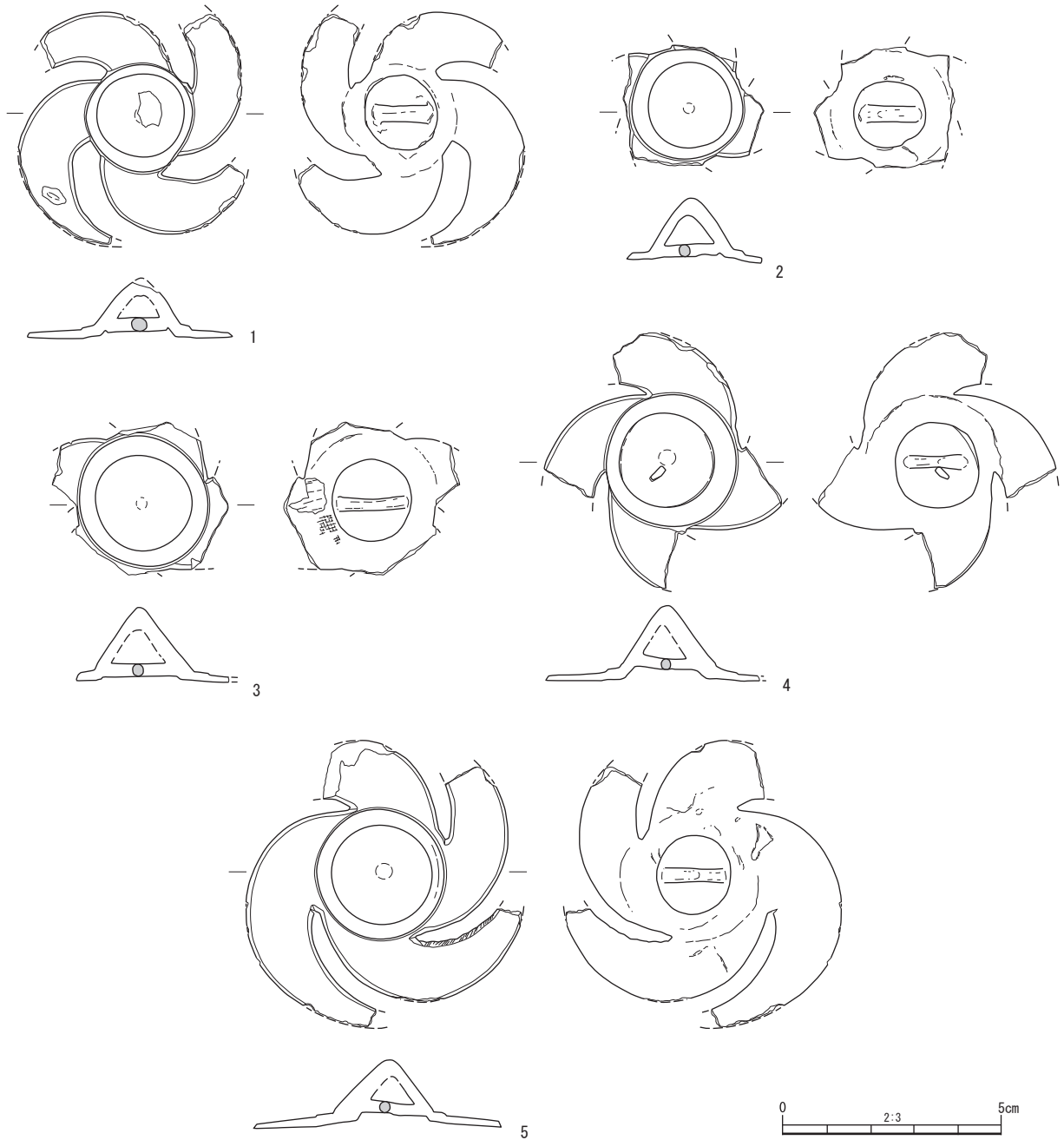


図5 白鳥古墳出土 巴形銅器

面と裏面に赤色顔料が付着する。

(岩本)

(4) 武器 (図6、図版13-1)

鉄刀の破片が4点ある。以下で述べるように、切先の数から少なくとも2振以上の鉄刀が副葬されていたとみられる。

1は切先を含む刃部の破片で、最大幅2.0cm、最大厚5mmである。鞘に由来する木質が付着する。2は刃部の破片で、最大幅2.2cm、最大厚6mmである。木質が付着しており、二枚合わせの鞘に納められていたと判断できる。1と2は刃部幅と厚さが近似するため、同一個体の可能性がある。

3は欠損がみられるが、切先を含む刃部の破片で、最大幅2.4cm、最大厚6mmである。二枚合

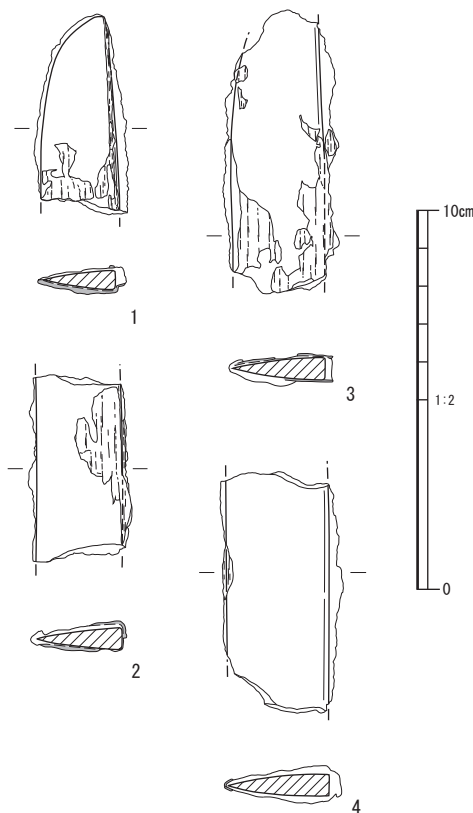


図6 白鳥古墳出土 鉄刀

わせの鞘に由来する木質が付着する。4は刃部の破片で、最大幅2.7cm、最大厚6mmである。わずかに木質が付着し、二枚合わせの鞘の痕跡とみられる。3と4は刃部幅と厚さが比較的地近いため、同一個体の可能性が想定される。(岩本)

(5) 農工具 (図7、表2、図版13-1・2)

① 袋 鑿 (図7、図版13-1)

刃部側を著しく欠損するため不確定要素を残すが、法量から鉄鉞ではなく袋鑿とみられる破片1点ある。断面はほぼ正円形の袋部を有し、中央の合わせ目は密着する。袋部端は直線的な形態を呈する、直基式に相当する個体である。残存長は5.1cm、最小部径約1.3cm、袋部端径約1.7cmである。厚さは最大で2mm程度である。袋部内部には柄に由来するとみられる木質が付着する。

(岩本)

② 鉄 斧 (図7、表2、図版13-2)

有袋鉄斧は、いずれも無肩有袋鉄斧であり、残存長10cm以下の小形品3点と残存長14cm前後の大形品2点で構成している。いずれの鉄斧も、袋部先端と刃部を欠失しており、全長は不明である。残存長など各部位の計測値は表2に示したとおりである。折返して袋部を成形する先端部分を欠失しており、袋部の接合状況は不明である。遺存状況からは、両端が閉じ合わない、開放した形状である可能性が想定できる。

鉄斧1は、袋部と刃部の間に屈曲がない。鉄斧2は、袋部と刃部の間にくびれを作りだしており、もっとも狭い部分で幅2.4cmをはかる。鉄斧3も、鉄斧2と同じく袋部と刃部の間にくびれを作り、最も狭い部分で幅3.1cmをはかる。袋部先端を欠失するものの、袋部の右辺は縁部が一部遺存している。くびれから刃部に向けて、やや急に幅をひろげる部分があり、なで肩の有肩鉄斧と見ることも可能であろう。袋部縁部からくびれ部まで、5.0cmをはかる。鉄斧4と鉄斧5は、袋部と刃部の間に屈曲はみえない。鉄斧5は刃部左半が遺存している。くびれのない大形品2点と、くびれのある小形品2点、そしてくびれの無い小形品1点の構成が遺存していることになる。

鉄斧5点は、大形品と小形品に分かれるが、いずれも全長7~14cm、刃部幅3~6cmの範囲にお

表2 白鳥古墳出土 鉄製品計測値

資料名	形状	残存最大長 (cm)	残存最大幅 (cm)	くびれ部幅 (cm)	刃部遺存最大幅 (cm)	刃部厚最大値 (cm)
鉄斧1	小形	8.2	3.6	—	3.6	0.8
鉄斧2	小形	10.0	3.2	2.4	3.2	1.0
鉄斧3	小形	9.8	3.9	3.1	3.9	0.9
鉄斧4	大形	14.2	5.0	—	5.0	1.4
鉄斧5	大形	13.4	5.0	—	5.0	1.6
方形板刃先	—	5.6	9.0	—	—	—

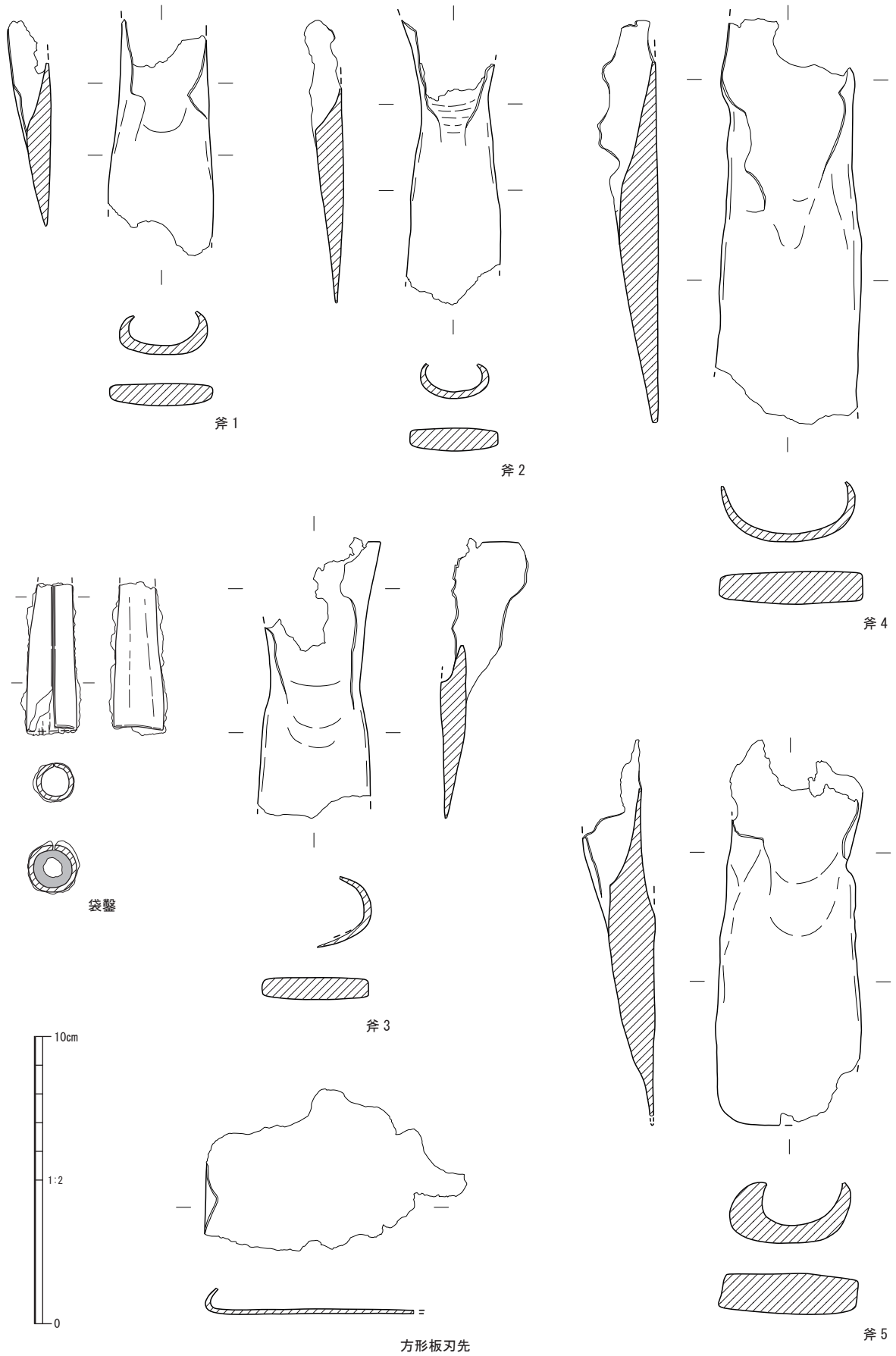


図7 白鳥古墳出土 袋鑿・鉄斧・方形板刃先

さまり、身の厚さも2cm前後には至らないので、古瀬清秀の分類による有袋鉄斧B2類に該当する〔古瀬1991〕。B2類は、古墳時代を通じて副葬が継続し、出土数をもっとも多いため、時期や流通などの特徴を見出すことは難しい。もし、大形品の2点を、全長15cm以上のB3類ととらえるならば(身の厚さは2cm以下だが)、短冊状鉄が消滅する4世紀末より後に時期を比定することができよう。(上野)

③ 方形板刃先 (図7、表2、図版13-2)

方形板刃先は、一辺を折り曲げた平坦な板状をなしている。折り曲げの一辺をのぞき、三辺はいずれも縁部を欠失している。遺存する最大幅は9.0cmをはかり、最大長は5.6cmをはかるため、刃部幅が10cm以下で両辺を折り曲げる鉄製穂積具の可能性はなく、やや大形の方形板刃先に該当する〔松井1987, 古瀬1991〕。(上野)

(6) 資料群の位置づけと評価

以上の資料化の成果にもとづき、各品目の分類上の位置づけを確認するとともに、そこから古墳の築造年代を検討する。さらに、古墳の築造年代をふまえて、副葬品の製作から副葬に至るまでのプロセスを明らかにすることによって、資料群の評価を試みることにしたい。(岩本)

① 各品目の位置づけ

銅鏡 鏡1は斜縁神獸鏡A系〔岩本2017b〕に属するが、既往の研究ではその位置づけがあまり論じられることのなかった鏡群である。和歌山県阪東丘2号墳や奈良県佐紀丸塚古墳、三重県筒野1号墳に類例があるが数は少ない。文様構成や表現などからは、白鳥鏡1と阪東丘鏡が古相、筒野鏡と佐紀丸塚鏡が新相を示すとみられる。筒野1号墳が水晶製玉類から広域編年IV・V期(前期後半)に比定される点を考慮すれば、白鳥鏡1の製作が広域編年III期を降る公算は小さい。白鳥鏡1で注目されるのは、内区主文部の空隙を充填するように配された鳥頭獸像である。この鳥頭獸像は鳥頭四獸鏡A系の主像文様と同じ表現をもつ。詳細にその表現を観察すると、頭部の嘴にあたる部分が大きめに立体的に表現されており、奈良県見田・大沢4号墳や兵庫県養久山1号墳、奈良県大和天神山古墳(7号鏡)などと共通することを指摘できる。このうち、大和天神山鏡は内区外周部の擬銘帯にS字文を採用する点でも白鳥鏡1と近似する特徴をもつ。見田・大沢4号墳が広域編年I期(前期前半古相)、養久山1号墳が広域編年II期(前期前半新相)、大和天神山古墳が広域編年III期(前期中葉)に比定しうることを勘案するならば、白鳥鏡1は遅くとも広域編年III期(前期中葉)には製作されていた可能性が高いと考える。

つぎに鏡2は後漢代の環状乳神獸鏡をモデルとするが、既往の研究の枠組みではその位置づけを明らかにしがたい。いっぽうで、先の事実報告において鏡2の評価を定めるに際して注目すべき特徴として、以下の2点を指摘したところである。すなわち、①内区乳の内側に神頭が配される点、②外区形態においてもっとも内側の文様帯部分を肥厚させる点である。①の特徴は白鳥鏡2が神頭鏡系と関連することをうかがわせる。神頭鏡系は広域編年IV期(前期後半)以降に副葬されはじめると推測されるため〔下垣2003〕、白鳥鏡2の時期もそれ以降となる可能性が濃厚である。さらに②の特徴は鼉龍鏡双胴系の岡山県鶴山丸山古墳鏡、対置式神獸鏡A系の兵庫県茶すり山古墳鏡、獸像鏡A系の岡山県千足古墳鏡にみとめられる。このうち、鶴山丸山鏡は下垣仁志の鼉龍鏡A系・段階4、茶すり山鏡は対置式神獸鏡A系・段階3で、ともに段階IVに比定されるとともに、広域編年V期(前期後半新相)に併行する〔下垣2003〕。したがって、白鳥鏡2は下垣の段階IVに位置づけることが可能である。

以上の検討から、白鳥鏡1は広域編年Ⅲ期（前期中葉）までに、白鳥鏡2は広域編年Ⅴ期（前期後半新相）までに製作されたと考える。（岩本）

玉類 管玉11点のうち、主体を占める9点は古墳時代前期後半に盛行する北陸系の太型品である。半島系管玉1点も、同時期のセットに組み込まれていることに違和感はない。花仙山産碧玉製の1点は材質から山陰系であることは確実で、再加工により本来の全長を失っているが、法量は大賀[2013]の領域JFaに相当するとみられる。花仙山産碧玉で領域JFaの法量をもつ管玉は、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半とTK23型式期以降の時期にみられ、後者の時期では片面穿孔が主体となることが知られている[大賀2009]。本資料は一見すると片面穿孔のようにも見えるが、本来は両面穿孔であったとみられる点を評価して、前者の時期に製作されたものであると考えておきたい。（谷澤）

巴形銅器 白鳥古墳から出土した巴形銅器は定型化した型式で、いずれも鈕が円錐体部の低い位置にとりつく棒状鈕3類である[岩本2017a]。棒状鈕3類の巴形銅器の副葬は、広域編年Ⅴ期（前期後半新相）に始動し、Ⅵ期（中期前葉古相）にかけて副葬例が目立つ。それ以降は事例数が減少するが、Ⅸ期（中期中葉新相）までは副葬が継続する[岩本2020・2022]。存続期間が長期におよぶが、棒状鈕3類に比定される巴形銅器の中心的な副葬時期は、広域編年Ⅴ期（前期後半新相）～Ⅵ期（中期前葉古相）とみてよいであろう。（岩本）

農工具 鉄斧と方形板刃先の組合せで、時期を限定してゆくことは困難である。しかし、ある程度の絞込みを可能にする要素はある。無肩鉄斧は、鉄斧4・5の大形品を大形の無肩鉄斧（有肩鉄斧B3類）に含めれば、和泉黄金塚古墳や金蔵山古墳など4世紀末（前期末葉：大賀前Ⅶ期、広域編年Ⅵ期）以後の時期を与えることになる[古瀬1991、大賀2002、岩本2020]。方形板刃先の副葬は、前期後半（広域編年Ⅴ・Ⅵ期）に盛行するが、中期にはU字形刃先の普及にともない衰退する[魚津2003、野島2013]。方形板刃先は、おおむね前期後半から中期中葉（TK216型式期前後）の間の時間でとらえることができよう。（上野）

② 資料群の評価と意義

上記したように、副葬品には前期後半を中心とした時期に比定しうる資料（鏡2、管玉〔北陸系太型品・半島系〕、巴形銅器、有袋鉄斧、方形板刃先）と、前期中葉を下限とした時期に比定しうる資料（鏡1、管玉〔花仙山産JFa〕）の二者がみとめられる。こうした状況にあつて、古墳の築造時期については前者の副葬品の年代を総合的にとらえるならば、広域編年Ⅵ期（中期前葉古相）に比定しておくのが妥当であろう。

さらに、白鳥古墳では数は限られるが埴輪の存在が確認されており、これによって古墳の築造年代を絞り込むことが可能である。円筒埴輪は底部高が15cm以上となることは確実であるが（図8）、それ以上の詳細が不明な資料である。ただし、半円形とみられる透かしが穿たれた位置がさほど高くなく、かつすべての破片を確認しても鱗を付加した個体はみいだせないことから、鱗付円筒埴輪は少なくとも多くは存在しないと予測され、Ⅱ期新相となる可能性が高い[廣瀬2015]。その場合、古墳の築造時期は広域編年Ⅵ期（中期前葉古相）となり、副葬品から想定した時期と整合する。

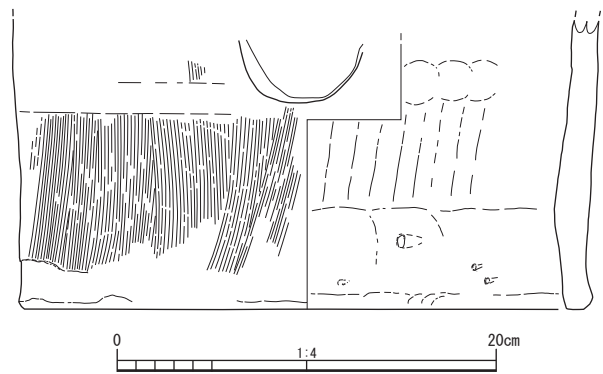


図8 白鳥古墳出土 円筒埴輪

白鳥古墳の築造年代を広域編年VI期（中期前葉古相）とみてよければ、副葬品のなかには古墳の時期より明らかに古相を示す器物が含まれていることが確実となる。鏡1とした斜縁神獸鏡A系と領域JFaの法量をもつ花仙山産管玉は、製作後スムーズに副葬されたのではなく、一定の保有期間が見込まれる「伝世・長期保有」品とみなすことが可能であろう。（岩本）

2. 阿多田古墳の副葬品（図9～11、図版14）

阿多田古墳は、熊毛半島西岸の基部に位置する。現在は陸続きの標高約32mの独立丘陵頂部に立地するが、往時は田布施川が平生湾に流れ込む位置にあった小島の最高所であったと想定される。墳丘長約40mの前方後円墳であり（図9）、墳丘斜面には葺石がほどこされる。埴輪は確認されていない。後円部の中央付近に主軸に直交した竪穴式石槨（規模は不明）があったとされる〔潮見・本村1978〕。現存する副葬品には、鏡1面、勾玉1点（ただし模造品）、管玉2点がある。（岩本）

（1）銅鏡（図10、図版14-1）

大・中型鏡の文様の一部を抜き出し、内区主文様としてデザイン化した倭鏡で、いわゆる捩文鏡である（図9、図版14-1）。

遺存状態 完形鏡であるが、外区を中心に錆ぶくれによる劣化が散見され、一部に亀裂もみとめられる。鏡面側には大きな錆ぶくれが発生している。縁部をわずかに破損するが、完形鏡である。鏡背面に部分的に赤色顔料がみとめられる。

法量 直径9.1cm、厚さは内区で1.0～1.8mm程度、外区で1.8～2.8mm程度である。鏡面の反りは4mm程度であり、大きさのわりに強い。重量は91gである。

文様・形態 中心の鈕は、直径約1.4cm、高さ約6mmであり、半球形を呈する。鈕孔は長方形に近い。鈕孔下辺の高さは鈕座面と等しい。鈕座に円圏をめぐらす。

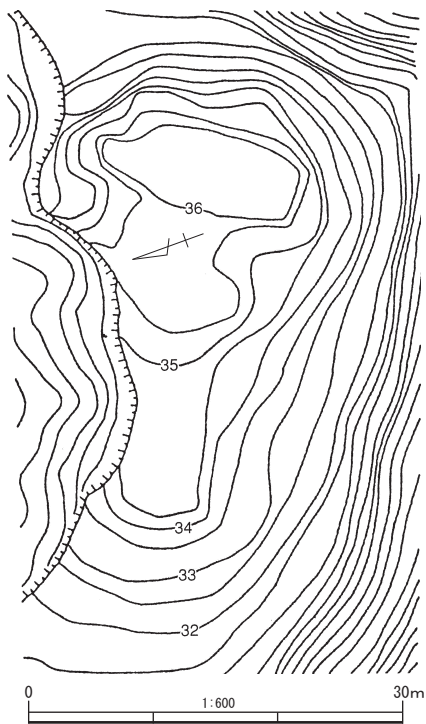


図9 阿多田古墳の墳丘

内区主文部は乳による分割はなく、2本1組の弧線で8区画する。各区画内に5本程度の細線による平行線を配して内区主文部を構成する。捩文鏡の多くは浮彫表現をとるが、本例は細線表現のみである。

内区主文部と1条の圏線によって隔てた内区外周部は、珠文帯と櫛歯文帯からなる。珠文は列状に1列を配する。

外区はわずかな斜面を介して内区より一段高くなる。文様のない素文の外区であり、上面が平坦で反りのない平縁をなす。

鑄造・研磨 図および写真で12時方向の内区主文部の外側から内区外周部にかけての範囲は、ほかより文様が不鮮明である。鈕孔の開口方向と一致する点からも、鑄引けによるものと想定され、湯口位置を反映すると考える。仕上げの研磨については、外区上面はきわめて平滑な表面状態であることから丁寧な研磨がほどこされたようであるが、鈕はわずかに粗さを留めているため研磨はさほど強くなされなかった可能性がある。

（岩本）

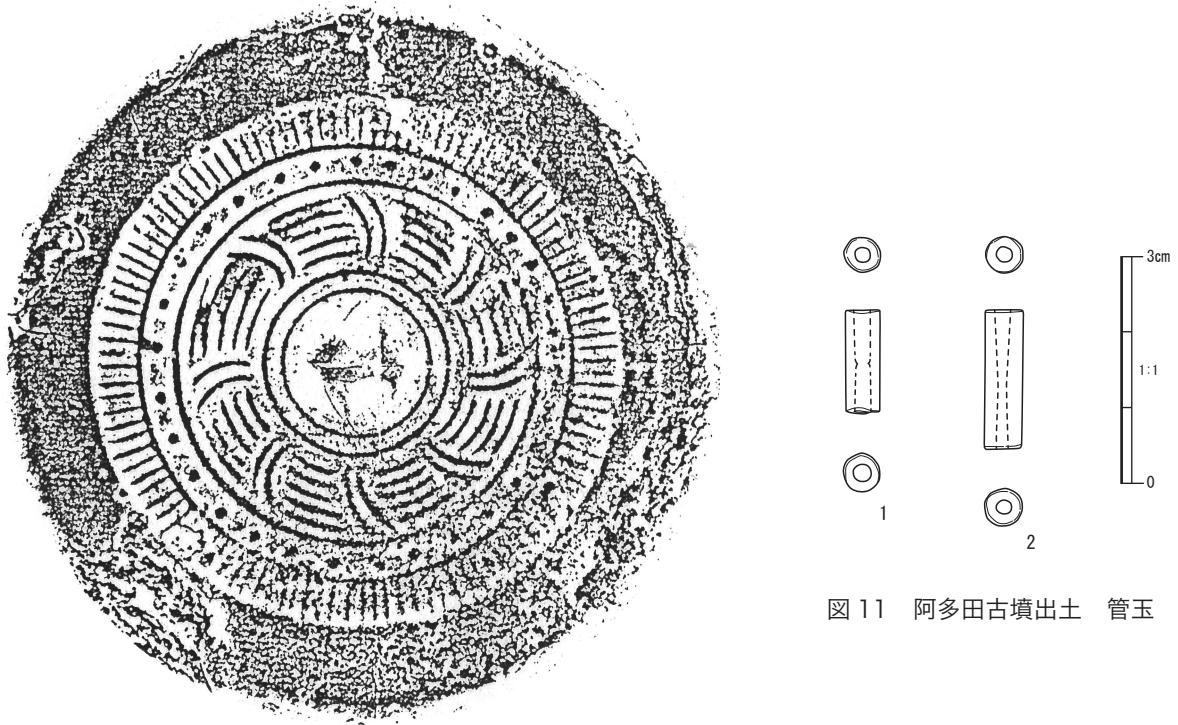


図 11 阿多田古墳出土 管玉

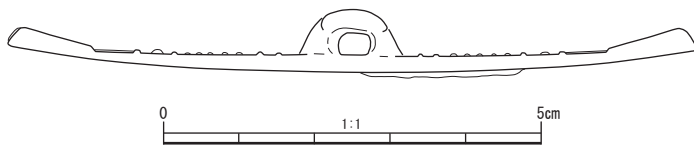


図 10 阿多田古墳出土 銅鏡

(2) 玉 類 (図 11、図版 14-2・3)

管 玉 (図版 14-2) 1は青灰色で光沢のある石材を素材とし、石針により両面穿孔される。直径5.00mm、全長13.15mm。2は緑灰色の硬質緑色凝灰岩を素材とし、鉄錐により両面穿孔される。直径4.9mm、全長18.00mm。大賀 [2013] の分類では、1は半島系、2は北陸系に該当する。

勾 玉 (図版 14-3) 1点の出土が知られるが、平生町歴史民俗資料館で保管されているものは樹脂製の模造品であった。これが出土品を忠実に再現したものであるならば、翡翠製で、幅13.35mm、全長21.30mm、厚さ7.10mmの小型品であったと考えられる。(谷澤)

(3) 時期的評価

上記の資料報告をふまえて阿多田古墳から出土した各遺物の年代を特定し、古墳の築造時期を考える材料を提示する。

① 各品目の位置づけ

銅 鏡 阿多田古墳の鏡は捩文鏡俵文系に帰属させうる例である。このうち、乳による区画がなく、平縁を呈するものが類例となる。新潟県奈良崎1号墳や香川県円養寺遺跡C地区古墳、石川県神谷内18号墳、京都府谷垣18号墳、岡山県日天王山古墳などは乳がないものの、主像を均等割

付けして整然と配する点でも阿多田鏡と共通点がある。これらの時期を決定することは容易ではないが、素文の平縁は全体的な傾向として上面が直線的で全体に厚みのあるものから、上面に反りをもって内側が薄くかつ外側へと厚みを増すものへと変化する。上記した類例のうち、①奈良崎鏡→②円養寺鏡・谷垣鏡・神谷内鏡・谷垣鏡→③日上天王山鏡の変遷を想定できる。阿多田鏡が②に該当し、③日上天王山鏡がおおまかに副葬時期としての広域編年Ⅲ期(前期中葉)に接点をもつ点を考慮すると[水野1997]、阿多田鏡が広域編年Ⅲ期の製作を降る可能性はきわめて低いと考える。(岩本)

玉類 管玉は2点とも小型品で、半島系1点と北陸系1点からなる。古墳時代前期後半に盛行する大型品を含まない点から、古墳時代前期前半までにセットが構成された可能性があるが、出土点数が少ないことから過大には評価できない。模造品からの判断だが、翡翠製勾玉1点も古墳時代前期のものと考えられる。(谷澤)

② 資料群の評価と意義

阿多田古墳については、現存する副葬品が倭鏡1面と管玉2点しかないため、古墳の築造時期を決定するには材料不足の感が否めない。ただし、時期比定の根拠としうる資料にもとづく限りは、それらの副葬時期の上限は広域編年Ⅲ期(前期中葉)に求められる。倭鏡および管玉の製作から副葬までがきわめてスムーズに進行したのであれば、阿多田古墳の築造は前期中葉ごろとなる。

いっぽう、阿多田古墳の築造年代が先行研究のように古墳時代中期に比定しうるのであれば、副葬された鏡と玉には「伝世・長期保有」を想定しうる余地が生ずる。ただし、今回の副葬品の資料化にもとづく限り、阿多田古墳の築造年代を古墳時代中期に引き下げる根拠は乏しく、前期中葉を上限としつつもそこからは大きく降らない年代を想定しておくのが妥当であると考えられる。(岩本)

まとめ

本稿では、山口県南東部に位置する熊毛地域の首長墓系譜に属する古墳として、白鳥古墳と阿多田古墳を対象に出土した副葬品の資料化をおこなった。さらに、資料化の成果にもとづき、個々の資料の年代的な位置づけを再検討し、2基の古墳の築造年代を絞り込む作業を実施した。その結果、白鳥古墳については広域編年Ⅵ期(中期前葉古相)、阿多田古墳については広域編年Ⅲ期(前期中葉)を上限とした年代を導き出した。

既往の研究においては、白鳥古墳と阿多田古墳の時期的な評価は十分におこなわれているとはいいがたく、『平生町史』[潮見・本村1978:132]で示された白鳥古墳→阿多田古墳の築造順序と古墳時代中期に比定されるとの理解がながらく踏襲されてきた。これにたいし、2基の古墳の築造順序が逆転するのではとの見方がごく最近に示され、そこでは阿多田古墳が広域編年Ⅴ期(前期後半新相)から広域編年Ⅵ期(中期前葉古相)、白鳥古墳が広域編年Ⅶ期(中期前葉新相)に比定された[岡田2022]。ただし、冒頭でふれたようにこの時期比定の根拠には不明な点があった。個々の副葬品の資料化と再検討によって先行研究の課題を克服し、客観的な検討にもとづいて古墳の築造年代を明らかにした点で本稿の作業には一定の意義があると考えられる。この成果が西部瀬戸内地域ひいては列島の古墳時代社会を理解するための一助となれば幸いである。(岩本)

付 記

本稿は、2020年9月2～4日に平生町歴史民俗資料館において実施した共同調査の成果報告である。共同調査は岩本崇、上野祥史、谷澤亜里の3名によるものである。報告にあたっては、品目ごとに分担して執筆をおこない、全体のとりまとめを岩本が担当した。共同調査の実施にあたっては、平生町教育委員会ならびに白鳥神社に多大なるご配慮をいただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

引用文献

- 岩本 崇 2010「茶すり山古墳副葬鏡群の位置—製作技術にみる銅鏡の系統性を中心に一」『史跡 茶すり山古墳』総括編 兵庫県文化財調査報告第383冊 兵庫県教育委員会 pp.447-467
- 岩本 崇 2017a「古墳出土巴形銅器の系譜と成立」『二十一世紀考古学の現在』六一書房 pp.535-545
- 岩本 崇 2017b「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第43号 日本考古学協会 pp.59-78
- 岩本 崇 2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 岩本 崇 2022「中期古墳年代論—相対編年とその暦年代」『中期古墳研究の現状と課題VI～新編年で読み解く地域の画期と社会変動～』中国四国前方後円墳研究会第25回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 pp.1-19
- 魚頭知克 2003「鉄製農工具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』第7回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会 pp.105-120
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会 pp.1-20
- 大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』古代出雲における玉作の研究III 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp.9-62
- 大賀克彦 2013「玉類」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年 同成社 pp.147-159
- 岡田裕之 2022「山口県」『中期古墳研究の現状と課題VI～新編年で読み解く地域の画期と社会変動～』中国四国前方後円墳研究会第25回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 pp.133-144
- 加藤一郎 2021『倭王権の考古学 古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部
- 潮見 浩・本村豪章 1978「平生地方の原始・古代」『平生町史』平生町役場 pp.50-151
- 下垣仁志 2003「古墳時代倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会 pp.19-50
- 中村徹也 2000「前方後円墳」『山口県史』資料編 考古1 山口県 pp.940-952
- 野島 永 2013「鉄製農工漁具」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社 pp.136-145
- 廣瀬 寛 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 弘津史文 1921「周防の大古墳について」『考古学雑誌』第11巻第12号 考古学会 p.34
- 弘津史文(編) 1927『周防国熊毛郡上代遺跡遺物発見地調査報告書』山口高等学校歴史教室内山高郷土史研究会
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 古墳II 副葬品 雄山閣出版 pp.71-91
- 松井和幸 1987「日本古代の鉄製鋤先・鋤先について」『考古学雑誌』第72巻第3号 pp.30-58
- 水野敏典 1997「捩文鏡の編年と製作動向」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集 津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会 pp.94-111
- 山口県教育委員会文化課(編) 1980『白鳥古墳』山口県平生町教育委員会

図表出典

図1：中村2000:p.947掲載図を引用・一部加筆。図2：岩本実測・製図。図3：岩本実測・製図、図4：谷澤実測・製図。図5：岩本実測・製図。図6：岩本実測・製図。図7：上野・岩本実測・製図。図8：岩本実測・製図。図9：中村2000:p.946掲載図を引用・一部加筆。図10：断面図は岩本実測・製図。拓本は平生町教育委員会提供。図11：谷澤実測・製図。表1：谷澤作成。表2：上野作成。

